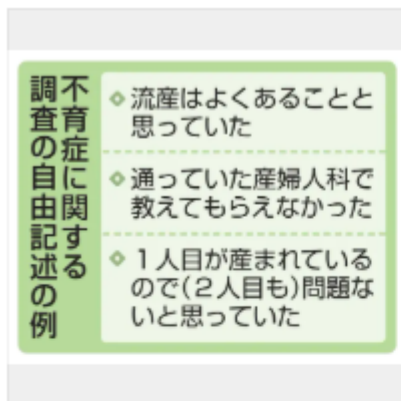


不育症「早く知りたかった」9割 流産・死産繰り返し負担



不育症調査に関する自由記述の例

流産や死産を繰り返す「不育症」の専門外来を受診した女性の91%が、不育症の知識を「早く知っておきたかった」と答えたとの調査結果を岡山大チームがまとめたことが2日分かった。不育症は妊婦の20人に1人が該当するとされるが、認知度の低さが浮き彫りとなった。調査を担当した中塚幹也教授（生殖医学）は「学校教育などを通じ知識を持つことが重要だ」と指摘している。

【写真】「あなたの体に、両親の血は1滴も入っていない」 63年前に産院で取り違えられた男性、実の親を探し続け 21年

チームは13日に名古屋市で開かれる日本不育症学会学術集会で調査結果を発表する。

不育症は、原因によっては投薬で対処できる上、不育症と知らずに流産を繰り返し精神的負担が大きくなるケースもあるため、早期に専門外来などを受診するのが望ましいとされる。

2025年5～8月に岡山、広島両県の専門外来を受診した女性85人が回答した。早く知っておきたかったと答えた人に、複数回答で具体的にどこで知識を得たかったかを尋ねると「流産・死産をした病院」が57%だった。また、53%が中学、高校、大学のいずれかの授業や性教育で知りたかったと回答し、学校教育の充実を望む声も多かった。